

小児の付き添い入院に対する母親と看護婦の意識調査

— 第2報 —

宮下 弘子¹・宮原 春美¹・松尾 孝佐²

藤本 澄江³・宮崎 麗子⁴・吉野 麻紀⁵

要 旨 長崎県下4施設の小児病棟に勤務する看護婦と、その病棟に入院している小児に付き添う母親に対して、付き添い入院をどのようにとらえているか、また、それぞれの役割をどう認識しているかについてアンケート調査を行い、看護婦76名、母親91名からの回答を得た。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 診療介助的行為は看護婦と母親が共に看護婦の役割と認識しているものが多かった。
2. 日常生活援助は両者共に母親の役割と認識しているものが多かった。
3. 日常生活援助であっても家庭での方法と異なるものや、小児への病気の説明などはそれぞれが自分の役割と認識していた。

長崎大医療技短大紀 10: 29-31, 1996

Key Words : 小児, 付き添い入院, 役割認識

はじめに

近年、医療や看護への家族参加やセルフケアへの関心が高まっており¹⁾、小児看護の領域でも家族参加が奨励されている。

しかし協力を求める反面、母親や家族に対して過度の負担を強いていることもあるのではないかと考える。患児に有効なケアを行うためには、看護婦と母親の役割意識を把握し、小児にとってはもちろんのこと母親、家族にとっても良いといえる入院のあり方を考えることが必要であると思われる。

そこで今回、私たちは入院している小児に付き添っている母親とそこに勤務する看護婦を対象に母親と看護婦の役割認識の違いを知り、よりよい小児の入院形態を検討する基礎資料とすることを目的に調査を行った。

研究方法

調査対象、調査方法、調査期間、対象の背景は第1報と同様である。

調査内容は廣末²⁾が小児の看護ケアの現状について面接や参加観察を通して作成した質問紙から22項目を抽出し、それらについて看護婦と母親のどちらが行っているかを「主に母親」、「どちらかといえば母親」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば看護婦」、「主に看護婦」の5段階尺度法で質問した。分析にあたっては「主に母親」、

「どちらかといえば母親」を「母親」、「主に看護婦」、「どちらかといえば看護婦」を「看護婦」とした。

結 果

調査結果を表1に示す。

看護婦と母親ともに、看護婦が行っていると認識しているケアは、「シーツ交換」(看護婦—以下Nとする—97.4%、母親—以下Mとする—81.3%)、「点滴管理」(N96.1%、M76.9%)や「検査介助」(N96.1%、M67.0%)等、診療介助的行為に多くみられた。

同様に母親が行っていると両者が認識しているものには「摂食介助」(N80.3%、M85.7%)、「食前手洗い」(N75.0%、M86.8%)、「排泄介助」(N60.6%、M89.0%)等、日常生活援助に関するケアが多かった。また、「勉強、遊びの相手」(N42.2%、M90.1%)、「子供の話し相手」(N40.9%、M86.8%)等、小児の精神面への援助もあった。

両者がそれぞれ自分達がケアしていると回答したものに「配膳」(NではN47.4%、M28.9%、MではN12.1%、M69.2%)、「排泄量観察」(NではN55.6%、M21.1%、MではN6.6%、M85.7%)、「身体を拭く」(NではN43.5%、M19.7%、MではN6.6%、M80.2%)、「入浴介助」(NではN56.6%、M10.5%、MではN9.9%、M34.0%)、「洗髪」(NではN82.9%、M0%、MではN15.4%、

1 長崎大学医療技術短期大学部看護学科

2 愛野町役場

3 島原保健所

4 厳原保健所

5 長崎大学医学部附属病院

表1. 看護婦と母親の役割意識

(数字: %)

回答者 役割認識	看護婦		母親	
	看護婦	母親	看護婦	母親
シーツ交換	97.4	0	81.3	4.4
点滴管理	96.1	0	76.9	12.1
検査介助	96.1	1.3	67.0	15.4
医師への報告	97.4	0	64.8	9.9
摂取介助	1.3	80.3	2.2	85.7
食前手洗い	1.3	75.0	0	86.8
排泄介助	6.5	60.6	2.2	89.0
排泄後手洗い	2.6	71.1	1.1	81.3
歯みがき	5.2	67.2	1.1	70.3
昼寝をうながす	11.8	61.9	0	86.8
勉強・遊びの相手	11.8	42.2	0	90.1
子供の話し相手	5.2	40.9	1.1	86.8
配膳	47.4	28.9	12.1	69.2
排泄量観察	55.6	21.1	6.6	85.7
身体を拭く	43.5	19.7	6.6	80.2
入浴介助	56.6	10.5	9.9	34.0
洗髪	82.9	0	15.4	32.9
子供への病気の説明	53.9	6.6	26.4	38.5
生活のリズムをつくる	35.5	18.5	2.2	73.6
眠れる環境をつくる	31.6	27.6	5.5	81.3
薬を飲ませる	27.7	36.8	5.5	75.8
ベッドの周囲の整頓	29.0	27.6	1.1	90.1

M32.9%), 「子供への病気の説明」(NではN53.9%, M6.6%, MではN26.4%, M38.5%), 「生活のリズムをつくる」(NではN35.5%, M18.5%, MではN2.2%, M73.6%)が挙げられた。

さらに、母親は母親自身で行っていると考え、看護婦は母親・看護婦どちらともいえないと考えている項目に、「眠れる環境をつくる」(NではN31.6%, M27.6%, MではN5.5%, M81.3%), 「薬を飲ませる」(NではN27.7%, M36.8%, MではN5.5%, M75.8%), 「ベッド周囲の整頓」(NではN29.0%, M27.6%, MではN1.1%, M90.1%)という項目が挙げられ、両者の役割認識にずれがみられた。

考 察

入院中の小児のケアに対する役割認識で、「点滴管理」、「検査介助」といった診療介助的行為は看護婦、母親とも看護婦が行っているケアとして認識しているものが圧倒的に多い。伊東らが行った同様の調査³⁾でも「診療に伴う援助の領域では、基本的な生活の援助に比べて看護婦が行なう場合が多いと認知している」と述べており、

医療や看護についての知識・技術をもつ看護婦という専門職として当然の結果と思われる。

両者がそれぞれ自分達がケアをしていると回答した項目は「配膳」、「排泄量観察」、「身体を拭く」、「入浴介助」、「洗髪」、「子供への病気の説明」、「生活のリズムをつくる」といったもので、看護婦と母親の間で役割認識に違いがみられた。これは「看護婦と母親のケア概念の相違・母親の親役割と看護婦の職業的役割の葛藤の影響が考えられる」と村田⁴⁾が述べるように、今回の調査結果においても同様のとらえ方ができる。また、「対象児の全てが看護婦と母親とで一致しているとはいえないことも考慮しなければならない」³⁾、「看護婦の場合、現実では母親にほとんどまかせていても、看護婦自身はそうは考えず、看護婦と母親との共同で行っているのとらえている」⁵⁾といった文献もあり看護婦と母親が根本的に異なる立場でとらえていることを示している。

一方、日常生活援助や精神面での援助など日常的に家庭でも母親が行っているケアは両者とも母親が行っていると認識していることが多かった。母親がこのようなケアに関わってくることに 대해서는、看護婦からも「小児に精神的安定を与えるだけでなく母親自身の精神的安定にもつながってくる」という意見が多く挙げられている。看護婦はこのような視点から、母親の付き添い入院が小児と母親双方にとって意義があると認識しているといえる。また中野は「基本的な生活に関する世話や特殊な処置などを家族が習熟すれば、家庭療養が可能になり、短期間の外泊または退院を早めて通院治療に切り替えることもできる場合がある。」⁶⁾と述べており、患児をもつ母親としての自覚を育て、異常の早期発見や日常のケアなど退院後も母親が家庭で自信をもって育児ができるための訓練ととらえることができる。しかし、ともすると本来ならば入院中の小児に対して看護婦が行うべき行為を小児に付き添っている母親にゆだねてしまう危険性も考えられる。あくまでも母親による家庭療養が可能となるよう支援していくことが基本であろう。その中で母親に不安や焦りがみられるようであれば手助けをし、母親が自信をもてるよう援助していく体制をとるべきであると考える。

なお、この論文の要旨は第42回日本小児保健学会で報告した。

この研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力くださいました病院関係者をはじめ、入院中の小児のご家族の方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 村田恵子：小児ケアをめぐる看護婦と親の役割意識が示唆するもの，小児看護，16:1615-1621，1993.
- 2) 廣末ゆか：小児看護におけるケアの現状，小児看護，16:871-880，1993.
- 3) 伊東和子，波多野梗子，村田恵子：入院患児の看護

- における看護婦と母親の役割(1)ー看護婦からみた看護内容の現実と期待ー, 看護研究, 10:109-117, 1977.
- 4) 村田恵子, 片田範子, 及川郁子, 平林優子, 筒井真由美, 舟島なおみ, 広末ゆか: 入院児のケアにおける看護婦と母親の役割意識ー子どもの年代間の相違ー, 小児保健研究, 53:418-424, 1994.
- 5) 村田恵子, 波多野梗子: 入院児の看護における看護婦と母親の役割(2)ー看護婦および母親の看護活動の現実と現実認知, 期待認知ー, 看護研究, 10:343-357, 1977.
- 6) 中野智津子: 長期入院児に対して家族が果たすべき役割とその指導, 小児看護, 13:413-417, 1990.